

病理検査室の窓辺から

悪性化する疾患

斉藤 隆三

PCL 東京 病理・細胞診センター

以前、石灰化上皮腫の臨床診断のため、その病理組織所見をみていたところ、石灰化上皮腫ではあるが、病変部の一部の細胞が悪性化している症例を経験した。このように良性の病変が経過中に悪性化した疾患として、表皮嚢腫の壁細胞の一部が癌化した症例や、脂腺母斑の二次腫瘍としての基底細胞癌の発症がある。なお、Bowen 病や日光角化症、放射線皮膚炎、色素性乾皮症など癌前駆症あるいは癌前駆状態の疾患では経過中に癌化をきたすことは知られている。

本来は良性の疾患でありながら、経過中に悪性化をみるのがときにより、そのような疾患について検討してみると、有棘細胞癌を発症する疾患が少なくない。たとえば、汗孔角化症で約 10%、硬化性萎縮性苔癬で数%、慢性円板状エリテマトーデスの瘢痕上や毛孔腫にもまれに起こり、熱傷瘢痕での熱傷瘢痕癌、さらに遷延する褥瘡・瘻孔部位に生じたり、静脈うっ滞性潰瘍や慢性創傷、臀部慢性膿皮症から生じるなど、繰り返す慢性炎症性病変からの報告もみられる。そのほか顆粒細胞腫の 1～2%に悪性化、巨大色素性母斑で悪性黒色腫の発症、エクリンらせん腺腫でもまれに悪性化がみられる。これらの悪性化する誘因については長期間の慢性炎症のサイトカインの働きなどが論じられているが、個々の症例に当たってその発生機序を検討する必要がある。

このような症例では、慢性に経過している間にその病変が急に増大してくるなどの症状の急激な変化をみることで悪性化に気づかされる。また、腫瘍性病変にたまたま二次感染がおこって炎症性変化が加わっての症状の変化をみることもあるが、経過中に症状の変化がおこった場合にはその理由を臨床的に検討することが必要で、悪性化の可能性も考え病理組織検査を加えることが重要である。